

クリミア戦争再考

——戦後150周年の見直しとその動向——

上宮真紀

1. はじめに

19世紀半ば、東地中海への南下政策を模索するロシアとそれに抵抗するトルコとのあいだにかねてから張りつめていた緊張関係が新しい局面を迎えた。1853年7月、エルサレム聖地管理権をめぐり、トルコ領内のギリシア正教徒保護を口実として、ロシアがトルコに宣戦布告したのである。そして翌1854年3月、「インドへの道」を確保すべく、地中海域の「安全」を望むイギリスは、フランスとともに、トルコを後押しするかたちでこれに参戦した。イギリスにとってのクリミア戦争のはじまりであった。

クリミア戦争参戦に対して、当時のイギリス社会は前代未聞の関心を示した。歴史家スーザン＝メアリ・グラントが「クリミア戦争 [の火ぶた] は……大衆の大熱狂ぶりが激増するなかで切られた」¹ と説明するとおり、人びとは「ロシアの専制政治を蔑視し、道すがら [参戦の] スローガンを叫び、愛国的な唄を歌い」²、娯楽空間ではクリミア戦争における戦闘をドラマ化した一大スペクタクルが人気を博し、『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』をはじめとする各メディアは、連日のようにその戦争の動向を大々的に伝えた³。国民が戦争に大興奮するこの様を、ヴィクトリア女王は日記のなかで、「信じられないほど大衆にうけた戦争」⁴だと表現している。

1 Susan-Mary Grant, 'New Light On the Lady With the Lamp', *History Today*, September 2002, p. 13.

2 Michael Paris, *Warrior Nation: Images of War in British Popular Culture, 1850-2000*, London: Reaktion Books, 2000, p. 32.

3 *Ibid.*, pp. 33-35.

4 Grant, *op. cit.*, p. 13; Paris, *op. cit.*, p. 32.

しかしながら、この戦争は、イギリス国民が単にスペクタクルとして、楽観的に傍観できるようなものではなかった。クリミア戦争に参戦したことによって、結果として、イギリスは自国の軍事機構の欠陥や非効率性、あるいは医療衛生に対する問題意識の欠落を表面化させてしまったからである。そして、それはある意味、クリミア戦争が持つ大衆性によって明るみに出たと言っても過言ではないだろう。その結果、この戦争経験を反面教師にして、フローレンス・ナイチンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910) はロンドンの聖トマス病院に看護養成学校を設立して、看護婦という職業の社会的地位の向上や医療現場の構造化を図り、陸相エドワード・カードウェル (Edward Cardwell, 1813-86) は1871年に軍制改革をおこなうなど、多方面で改革が進められることになった。ケンブリッジ公 (George William Frederick Charles, 1819-1904) が中心となっておこなわれた軍楽隊改革もそのひとつであり、それについては後述するとおりである。

現在、イギリスでは、クリミア戦争がパリ条約締結によって終戦を迎えた1856年から150年目にあたる2006年にむけて、戦争そのものを綴った著作はもちろんのこと、この戦争にかかわった軍隊関係者や民間人の書簡集や日誌、彼らの伝記などの復刻や刊行が相次いでいる⁵。また、ウィンザー城のギャラリーでは、クリミア戦争を扱った特別展示が設けられ、この戦争のプロセスを図式で説明し、王室文書館が所蔵するヴィクトリア女王とナイチンゲールとの往復書簡やイギリスが従軍カメラマンとして初めて戦地へ送ったロジャー・フェントン (Roger Fenton, 1819-69) が戦地を撮影した写真をはじめ、クリミア戦争に関連する絵画などを一般公開し、当時のイギリス人たちがどのように戦争を受け止めていたのかを考え直す企画をおこなっている。あるいは、ロンドンのチェルシーにある国立陸軍博物館でも同様に、特別展示として、当時実際に

5 本論では、紙面の関係上、紹介することはできないが、ここ数年間で刊行されたクリミア戦争に関連した著作として、たとえば、Guy Arnold & John Worrionoff (eds.), *Historical Dictionary of the Crimean War*, Scarecrow Press, 2002; Florence Nightingale (ed. by Lynn McDonald), *The Collected Works of Florence Nightingale vol. 1-4*, Laurier (Wilfrid) University Press, 2002; Donald Thomas, *Cardigan: Hero of Balaclava*, Weidenfeld & Nicholson Military, 2002; Ruth Brandon, *People's Chef: Alexis Soyer, a Life in Seven Courses*, John Wiley and Sons Ltd, 2004 などがある。

ナイチンゲールが使用したとされるランプ、戦闘命令書、士官の日記などを陳列し、この戦争における軍隊の統御について、さらには、それが兵士および戦争にかかわっていた民間人に与えた影響について分析している。このように、イギリスでは戦争終結から150周年を迎えるにあたって、本の出版や絵画、写真、戦地で使用された物品の展示など目に見えるかたちを通じて、クリミア戦争という出来事について、また戦闘の様相や軍隊関係者のみならず、戦争にかかわったさまざまな人びとについて、今一度見つめ直そうとする動きが活発化しているのである。

いったい今、イギリスではクリミア戦争をどのように再考しようとしているのか。そして、それは従来語られてきたクリミア戦争像にどのような修正を迫るものなのか。本論考では、近年出版されたクリミア戦争にかんする著作を整理し、その動向を追いながら、今イギリスで急速に進められている「クリミア戦争に対する見直し」のなかで、何が問題として浮上してきているのかについて考えていきたい。

2. 研究の諸相

クリミア戦争終戦直後から、イギリスでは、帰還したばかりの士官たちの書簡集や回顧録などが続々と出版された。その後、ちょうど世紀転換期を迎えた戦後50年前後には、カール・マルクスがクリミア戦争勃発当時、この戦争について言及した手紙の数々を綴じた『東方問題』（1897年）やレオポルド・ヒースの『黒海からの手紙』（1897年）、リチャード・ケリーの『クリミア戦争時、妻へ送ったある士官の手紙』（1902年）をはじめ、その当時、実際にクリミア戦争を肌で感じた人びとの叙述、とりわけ彼らの書簡集や回想録などの刊行によって、やはり戦後直後と同様に、「個人の記憶」としてのクリミア戦争の記憶が構築されていったといえるだろう⁶。ここではまず、150周年へと進む現在の見直

6 たとえば、そのほかに刊行されたものとして、Edward Rowe Fisher Rowe (ed. by L. R. Fisher-Rowe), *Extracts from Letter of E. R. Fisher-Rowe...during the Crimea War, 1854-55*, Godalming, 1907 や Douglas Reid, *Memories of the Crimea*, London: St. Catherine Press, 1911 などがある。ところが、第一次世界大戦をはさんでそれ以降、たとえば、Ida Beatrice O'malley, *Florence Nighingale, 1820-1856: A Study of her life down to the end of the Crimean War*, Thornton Butterworth, 1931 が刊行されているものの、100年目の1953年前後になるまで、それ以前よりも、クリミア戦争を語る著作があまり多くは刊行されなかったように思われる。

しとの比較から、20世紀、とりわけクリミア戦争の勃発、そして終戦から100年目を迎えた1953～56年以降になされた研究を中心に整理することにしたい。

明らかに、クリミア戦争勃発100周年を意識して出版された著作として注目されるのは、セシル・ウッダム＝スミスの『その理由はなぜ』(1953年)であろう。ウッダム＝スミスは、桂冠詩人アルフレッド・テニスン (Alfred Tennyson, 1809-92) の書き記した詩によってイギリスじゅうにその惨劇が知れわたることになった、バラクラヴァでの「軽騎兵隊の突撃」の大失敗(1854年)⁷に焦点を当て、その原因をイギリス陸軍にはびこる保守的な伝統、とりわけ、位階購買制⁸に探っている。彼は、金銭売買することで士官職を獲得し、戦争経験や軍人としての能力をいっさい重視しないこの制度こそ、クリミア戦争の指導者ラグラン卿 (Fitzroy James Henry Somerset, 1788-1855) やカーディガン伯 (James Thomas Brudenell, 1787-1868) の無能さ、そしてその極みとしての「突撃」を生み出したのだと主張する。

この著作を皮切りに、その後、クリストファ・ヒバート著『ラグラン卿の破滅——クリミア戦争の悲劇1854～55年』(1961年)、J・コナチェの『アバディーン連合政権1852～55年』(1968年)、フィリップ・ワーナーの『クリミア戦争再考』(1972年)が出された。さらには、同じくコナチェが1968年に上梓した研究書の続篇としての『イギリスとクリミア 1855～56年——戦争と平和の諸問題』(1987年)を出版し、そして、それにつづいてアンドリュー・ランバートの『クリミア戦争——イギリスの壮大なる対ロシア戦略』(1990年)、デイヴィッド・ゴールドフランク著『クリミア戦争の起源』(1994年)が世に送り出され

7 1854年10月25日、バラクラヴァにて、カーディガン伯率いる軽騎兵隊が孤立したロシア軍の前哨隊を処理するよう命ぜられたにもかかわらず、ロシア軍の主隊である砲兵陣地に突っ込んでしまい、無惨な結果に終わってしまった。指令を下したラグラン卿とただ命令に従ったのみというカーディガン伯の主張には食い違いがあり、この事件について『タイムズ』のラッセルの記事で知ったテニスンは、まさに「軽騎兵隊の突撃 (the Charge of the Light Brigade)」と題する詩のなかで、クリミアでのイギリス兵の戦いぶりや苦労をねぎらいつつ、「誰かがへまをやらかした」とその苦悶を書き記している。Peter Burroughs, 'An Unreformed Army?' David Chandler and Ian Beckett (eds.), *The Oxford History of the British Army*, Oxford UP, 1994 (2003), pp. 180-83.

8 位階購買制 (purchase system) の詳細については、村岡健次「陸軍士官の位階購買制」『近代イギリスの社会と文化』ミネルヴァ書房、2002年、165-216頁を参照されたい。

るなど、20世紀末に至るまで、以下のような傾向の見直しがなされてきた。すなわち、なぜ戦争が勃発したのか、その原因を当時のイギリス国内の政治体制や国際情勢に探り、そして次に、クリミア戦争における主要な戦役となるアルマおよびバラクラヴァの戦い、セヴァストポリ包囲戦といった戦闘そのものについての叙述が顕著にみられる。そして、戦場を再現したその端々には、イギリス軍の軍組織としての欠陥、戦略上の不備、医療衛生に対する問題意識の欠落やそこから生じる兵士たちの苦悩などについての説明が書き添えられていた。つまり総じて、戦争の事実経過をイギリスの立場から詳細に年代順に描写し、分析する様式が多く取り入れられてきたといえるのだ。このことから、世紀転換期には著しくみられた「個人の記憶」としてのクリミア戦争像よりも、もっと戦闘そのものやその因果関係を重視した、語弊を恐れずにいえば、集合的な「国民の記憶」として、この戦争が構築され始めたのが100周年を迎えたこの時期であったと結論づけられる。

また、クリミア戦争を戦った士官たち以上に、イギリス初の従軍記者の一人となった『タイムズ』の記者ウィリアム・ラッセル (William Howard Russell, 1820-1907) や写真家フェントンなど、兵士としてではなく一民間人としてこの戦争に携わった人物の生涯や彼らの戦争経験を考察する研究が比較的多いことも、従来のクリミア戦争研究のひとつの特徴である。とりわけ、イギリス軍の戦死者のうち、その過半数が戦いそのものよりもコレラなど疫病の蔓延による病死者であったなかで、野戦病院にて兵士たちの衛生や医療問題に尽力したナイチンゲールについては、2003年に邦訳もなされたヒュー・スモールの『ナイチンゲール——神話と真実』(みすず書房, 原書1998年)を含め、その研究の多さには目を見張るものがある。まさにこれは、クリミア戦争が19世紀にイギリスがおこなった「主要な」戦争のなかで、「偉大」と呼ばれるような軍人を輩出しなかった唯一の戦争である⁹と述べた歴史家F・マックリンのことは何よりも具体的に示す結果であろう。

こうしたなか、終戦150周年を目前に控えた昨今、イギリスで始まったクリミア戦争再考には、それまでにはない特徴や論点が認められる。たとえば、

9 Frank McLynn, 'Unnecessary War', *New Statesman*, Vol. 128, Issue 4463, November 1999, p. 64.

1999年に出版されたウィンフリード・バームガルトの『クリミア戦争1853～1856年』では、クリミア戦争勃発の発端について、従来語られてきたエルサレム聖地管理権という宗教上の問題を重視するよりも、もっと濃厚な政治的意味合いのなかで実施されたものであると捉え、戦争直前や戦中の各国の外交上の駆け引きに注目し、戦争への直接的な干渉を避けて中立を保持した諸国の動機について探ろうとしている。また、クリミア戦争におけるイギリスの情報活動について、とりわけ、戦地で活躍したある民間人の情報活動を中心に、この戦争のあり方を分析したスティーヴン・ハリスの『クリミア戦争におけるイギリス軍情報』（1999年）や軽騎兵隊の突撃とランプを持つ天使ナイチンゲールにかんする語りによってクリミア戦争が神話化してしまったことを危惧し、その神話の背後に隠遁された「事実」——戦争の背景となった各国の政治操作やそれによってもたらされた結果、あるいは戦後、イギリス国内で叫ばれた政治上のさまざまな改革——を描こうと試みたクライヴ・ポンティングの『クリミア戦争——神話にひそむ物語』（2004年）なども、これまでにはない特徴を備えた研究書のうちのいくつかである。以下では、こうした著作のなかでも、150年の歳月が流れたがゆえに、あるいは、だからこそ、関心を寄せられるようになった側面に焦点を当てたことを掲げて注目される著作を整理してみたい。

まずは、トレヴァー・ロイルの『クリミア——大クリミア戦争』（1999年）である。同書の大きな特徴は、クリミア戦争を次のように特徴づけていることだろう。すなわち、この戦争は、ナポレオン戦争以来40年間保たれてきた国際情勢の安定を崩壊させ、その後のロシアの農奴解放、あるいはイタリア統一といった動きへの地ならしとなった戦争であり、またこの戦争こそが、塹壕戦やライフル銃弾など将来の戦争のかたちを予示するものであったのだ、と。さらには、この戦争と20世紀という時代の連続性を重視し、クリミア戦争の一因と考えられるこの時代に持ち上がったロシア、オーストリア、トルコ、スラヴなどバルカン半島におけるナショナリティをめぐる問題、いわゆる「東方問題」が、その後も解決されることなく、ヨーロッパ全体を苦しめた問題であったとして、第一次世界大戦、ナチスのソヴィエト侵攻、そして1990年代のロシア共産主義の崩壊にまでその波紋が広がったと述べる。そして、クリミア戦争が決して現在の国際問題と無関係ではないことを強調した。このようにクリミア戦争を捉

えた上で、ロイルは、これまでの研究に欠陥する点として、トルコ、イギリス、フランス連合軍、そして敵対するロシアそれぞれが従事する方針や各々が抱える国内の諸問題などに対する視野を指摘し、それらを織り交ぜながら、この戦争で展開された戦闘の様をあぶり出した。

とはいえ、ロイルは、あくまでも従来なされてきたクリミア戦争についての語り方の図式を大きく変えてはいない。各国の外交上の戦略、そしてそこに戦争勃発の原因をさぐり、イギリスの立場からそれぞれの戦闘の様子や連合軍（主としてイギリス）の行動を描写する形式はこれまでと一見同じに見える。しかしながら、彼はクリミア戦争を英仏・トルコ/ロシアという二項対立の構図に収めてしまうことを回避し、とりわけ連合軍のなかでも、イギリスとフランスが決して同質であることはなく、むしろ対照的な特徴をもつことを指摘する点が注目されよう。

ロイルによれば、両国の参戦当初、フランスではアルジェリア戦争（1830～47年）を経験した職業軍人たちのおかげで、彼らをはじめフランス陣営には戦争に対する心得が十分に確立されており、クリミアにおいても順調そのものであったが、二度目の冬を迎えるころまでに、次第に彼らの奮闘ぶりが萎えていったという。その一方、参戦直後に「軽騎兵隊の突撃」の惨劇を被るなど苦渋を味わうことにはなったものの、その後徐々に戦場に適応していき、統制のとれたより改善された軍隊へと進歩したのがイギリス軍だった、とロイルは説明するのである。また彼は、クリミア戦争にかんして医療衛生の面から議論される対象が常にイギリスであることに触れ、たとえば、医療面でもっとも問題を抱えているのがトルコ軍である、と書き記したあるイギリス人士官のことばを引用し、1854年のロンドンにおけるコレラ発生と絡めながら、戦地のイギリス軍だけが他国軍や本国にいるイギリス人たちよりも衛生面において殊に悪質な環境下にあったわけではないこと、従来、クリミア戦争において、イギリス軍がおかれていた状況を過剰にスキャンダラスに含蓄させすぎていたことを喚起している。

さらに、ロイルの議論は、クリミア戦争がこれに参戦した一部の国にかんする問題だけにとどまらず、それ以外の国々にも幅広く波紋を投じていた様を詳細に描いている。そのなかでもとりわけ強調するのが、アメリカ・メキシコ戦

争（1846～48年）の退役軍人のクリミアへの派兵と中立法（1818年）の侵害をめぐって、アメリカがイギリスを激しく非難したことで次第に高まった英米関係の緊張であった。ロイルはここに、1850年代後半に険悪化した英米両国間の関係の一端が認められると主張するのである。

このように論じていくことで、ロイルは、イギリス軍を中心に各戦闘の様子を記述する従来の形式を越えて、クリミア戦争というものを機軸に、それがいかに1850年代のイギリスと他国との関係に影響を及ぼしたのか、あるいは、それがいかに近代ヨーロッパ世界を形成する助けとなったのかを浮き彫りにした。もはや戦争をその瞬間の武力衝突のかたちとしてのみ捉えることはできない。というのも、先にも述べたとおり、このとき形成された世界がのちに第一次世界大戦、さらには現代にまで引きずる問題を生み出すことになるからであり、そこにロイルのクリミア戦争を考える重要性があったのである。

この「クリミア戦争から第一次世界大戦へ」というロイルの系譜を引き継いだ上で、彼のアプローチがなおも不十分であるとして、軍事史家イアン・フレッチャーは次のように指摘した。ある同じ歴史の一断片を叙述するにしても、それぞれのナショナリティによって、その見方には差異が生じるものである。たとえば、イギリスでは、セヴァストポリ攻防戦で活躍し、そのさなかに殉職した三人のロシアの英雄の名前¹⁰を知るものは数少ないし、あるいはロシア側の知識として、「軽騎兵隊の突撃」にかんする知識がほとんどないどころか、セヴァストポリ包囲という出来事がクリミア戦争の一部だと認識していない人もいる。すなわち、互いの理解が齟齬するのである。これまでの研究は、結局のところ、戦争で対立した国それぞれの立場から一方的に議論しているにすぎないのだ、と。だからこそ次にすべきことは、この戦争でイギリスと対立したロシアを基盤に活躍する学者と互いに向き合いあうことであり、その成果がまさに戦地クリミア（ウクライナ）出身の歴史家ナタリア・インチェンコとの共著『クリミア戦争——帝国の衝突』（2004年）であった。

イギリス-ロシア間の初のコラボレーションとして、英語で執筆、出版されたこの著作では、主として1854年10月～1856年9月にまでおよぶセヴァストポ

10 この三人とは、コルニーロフ（V. A. Kornilov, 1806-55）、イストミン（V. I. Istomin, 1809-55）、ナキモフ（P. S. Nakhimov, 1802-55）という軍人であった。

り攻防戦について、イギリスでなされた研究では今までほとんど手がつけられなかったロシアの地方文書館に保管される手書き史料を読みほどこきながら、叙事的に語られる¹¹。と同時に、戦闘の中身以外にクリミア戦争の記憶としては、すぐさまナイチンゲールの活躍と結びつけられる向きがあるが、この戦争で兵士たちの医療衛生に尽力したのは決してイギリス側の話だけにとどまらないとして、ロシア軍の「ナイチンゲール」とも言うべき、ロシア史上初の看護婦といわれるダーシャ・セヴァストポルスカヤ (Dasha Sevastopolskaya) やロシア軍の医療現場を組織化し直した外科医ニコライ・ピロゴフ (Nikolai Pirogov, 1810-81) の存在に光を当て、ロシアにおいても戦時の医療現場に新しい時代が到来していたことを明らかにした。このように、イギリスとロシアの研究者が協力し、それぞれの史料を検証し、双方の視点を合わせ鏡にすることによって、終戦150年目にしてようやく、これまでイギリスにおいては自国の視点に偏重的であったクリミア戦争を理解する方法に、新たな広がりを作り出すことが可能になったのであった。

しかしながら、フレッチャーとインチェンコが危惧すること、すなわち、ナショナリティによって戦争の捉え方に差異が認められることとは、クリミア戦争を過去のものとして記憶する後世の産物ではない。クリミア戦争が始まったその当時から、イギリス/ロシアそれぞれの見方には相違があったことを主張する研究書も注目される。たとえば、戦争進行中、イギリス国民がどのようにクリミア戦争をまなざしていたのか、この問題について、ロイルやフレッチャーとは手法を変えて、クリミア戦争を文化の面から検証したのがウルリヒ・ケラーの『究極のスペクタクル——視覚によるクリミア戦争の歴史』(2001年)である。

クリミア戦争の時代とは、イギリス国内においては、ちょうどスペクタクル文化が真っ盛りの時代であった。およそ18世紀末に始まるパノラマやジオラマ、

11 これまで、イギリスの研究者がこれらの史料を手にする事ができなかった背景には、第二次世界大戦後の冷戦が関係していたと思われる。たとえば、国立陸軍博物館ブックシリーズ『クリミア戦争——知られざる物語』の著者マッシーは、同書のなかで、冷戦期には、クリミア戦争の最大の舞台であるセヴァストポリ周辺に外国人が立ち寄ることができなかったと記述している。Alastair Massie, *The National Army Museum Book of the Crimean War: The Untold Stories*, Pan Books, 2004 (2005), p. xvii.

版画産業の進展とともに、美術ジャンルでいえば歴史画の制作活動が勢いを増し、19世紀も半ばになるとそれらが幅広く普及した。これによって、人びとは、戦地に行かずとも戦地の様子をうかがい知ることができるようになったのである。先述したとおり、国民がクリミア戦争に熱狂し、女王が「信じられないほど大衆にうけている」と記述したのは、この結果とも言えるだろう。

この事実に着眼したケラーは、クリミア戦争の現場で制作された写真や絵画など、視覚にうったえるスペクタクルとして国内で流布したものを紹介し、戦地で現実に行ったエピソードが国内にどのように伝達され、創造され直したのか、そしてそこにはどのようなレトリックが働いたのか、戦地での現実と創り上げられたスペクタクル世界との関係性について考察している。さらには、国内で再創造/想像された戦争イメージ（あるいは、創造し直す必要性を求めること）がいかに戦地で展開される行動に作用したのかについても展望する。海外で展開される戦闘とそれをイメージ化していく銃後における文化を浮き彫りにするという点において、1980年代から今なおマンチェスター大学出版局から続々と刊行されている帝国主義研究シリーズを中心に盛んとなった、大英帝国を視野に入れた民衆文化のあり方（民衆帝国主義、文化帝国主義）を捉えようとする動向と重ね合わせてみることができよう。

さらには、マイケル・モーソン編『クリミアの目撃者——ジョージ・フレデリック・ダラス中佐のクリミア戦争書簡』（2001年）や国立陸軍博物館の文書・写真・映像・音響部門（Department of Archives, Photo, Film, and Sound）の部長であるアラスデア・マッシーが戦地へ赴いた士官や兵士たちの日記や手紙、回想録など同博物館所蔵のさまざまな史料を駆使して紡ぎ出した国立陸軍博物館ブックシリーズ『クリミア戦争——知られざる物語』（2004年、以下『知られざる物語』と略す）、マイケル・スプリングマン著『射撃の名手、クリミアにて——ジェラルド・グッドレイク大尉の手紙1854～56年』（2005年）など、戦争を経験した人びとが書き残した文書をもとに戦地での彼らの生の声に耳を傾けはじめたことも、戦後100周年には認められなかった昨今の新しいクリミア戦争研究のひとつの特徴であろう。従来、とりわけアルマの戦いや軽騎兵隊の突撃を引き起こしたバラクラヴァの戦いなど、連合軍が参戦して間もない戦争初期にかんする内容が多く語られてきたのだが、実は、兵士たちの手紙

や日誌がもっとも多く書かれたのは、戦争も最終段階に入ったころのことであった、とマッシーは述べる。こうした史料を用いることで、マッシーは、『知られざる物語』のおよそ半分を割いて戦争が終盤に差し迫った時期の戦地の様子を詳細に描き出し、それが歴史に埋もれた「知られざる物語」のごく一部にすぎないと注釈を加えながらも、それでもなお、既存の研究とは異なった、兵士たちがいかに戦闘に立ち向かっていったのかという、戦場における彼らの生身あふれる人間らしい側面を巧みに浮き上がらせたのである。

また、詳細を個別に論述する紙面的な余裕はないものの、クリミア戦争を再考する他の新しい視点として、ジェンダー、エスニシティの諸問題と関連づけた業績も目をひく。そのなかでも、ここ数年、イギリスでもっとも関心を寄せられるジャマイカ出身のある一人の女性の存在は注目されよう。近年、彼女が1857年に出版した自伝が復刻され、それに引き続いて、それをもとにした伝記が出版されたことによって、雑誌などでもこれに関連する特集記事が多く掲載されている。また、テレビでは彼女の生涯を追った番組が繰り返し放映され、新聞やインターネット上ではさまざまな議論が交わされたりするなど、2004年1月にBBCが発表した世論調査「偉大なる黒人イギリス人 (Great Black Britons)」で第一位に選出されたこと¹²、さらには、2005年1月には、ヴィク

12 2001年、BBCが世論調査「偉大なイギリス人 (Great Britons)」を実施した際、あらかじめ選択肢として選出された100人のなかに、黒人のすがたはいっさい含まれていなかった。これに対して矛盾を訴えたパトリック・ヴァーノン (ウェブサイト「ブラック・ヘリテイジ」の設立者) とBBCが共同で実施したものが、「偉大なる黒人イギリス人」である。「偉大なイギリス人」と同様、すでに列挙された100人のなかから一名を選択し、インターネットで投票する形式でおこなわれ、実施期間2003年10月1日～2004年1月1日の3ヶ月間でおおよそ10万票 (ネット上の管理により、投票は一人一票に制限されている) を記録した。候補リストのなかには、エドワード3世 (在位1327-77年) の妻フィリパから19世紀の作曲家サミュエル・コールリッジ=テイラー (Samuel Coleridge-Taylor, 1875-1912)、現代のモデル、ナオミ・キャンベル、小説『ホワイト・ティース』(2000年) で大ベストセラーを記録し、ウィットブレッド賞処女長篇賞、ガーディアン新人賞、コモンウェルス作家賞新人賞などを相次いで受賞した現代作家ゼイディ・スミス (Zadie Smith, 1975-) に至るまで多彩な顔ぶれがノミネートされ、投票の結果、二位には黒人初の英国国教会主教となったウィルフレッド・ウッド (Wilfred Wood, 1936-)、三位に黒人として初の女流作家となった元奴隷メアリ・プリンス (Mary Prince, c. 1788-)、そして、十位には現代の社会学者でカルチュラル・スタディーズの第一人者として知られるスチュアート・ホール (Stuart Hall, 1932-) が選出された。Guardian, 10 February, 2004.

トリア朝の無名の若手画家アルバート・チャールズ・チャレン (Albert Charles Challen, 1847-81) が描いた現存する唯一の油彩画とされる、2002年に発見された彼女の肖像画 (1869年ごろ) の一般公開がナショナル・ポートレイト・ギャラリーで開始されたこととあいまって、最近では、ともすればナイチンゲールよりも真っ先にクリミア戦争と結びつけられるのがこの女性である。彼女の名前は、メアリ・シーコル (Mary Seacole, c. 1805-81) という。ジャマイカ出身の彼女がクリミア戦争とどのようにかかわっていたのか。そして今、彼女をめぐってこの戦争について何がどのように語られ、その先にはどのような新しいクリミア戦争像があるのだろうか。

以下では、シーコルの伝記作家ジェイン・ロビンソンやヘレン・ラップポートの記述を参考にしてシーコルの生涯を追いながら、これについて考えてみたい。

3. よみがえるシーコルの記憶

メアリ・ジェイン・シーコル (旧姓グラント) は、1805年ごろ、イギリスの植民地ジャマイカで、スコットランド人兵士の父と現地人の母のあいだに生まれた。シーコルは、ジャマイカに駐留するイギリス人士官とその家族が頻繁に訪れる宿屋を経営する母を幼少のころから手伝いながら、その母からクレオールに伝わる薬草治療にかんする知識を学び、宿屋を訪れるイギリス兵士たちのケアに努めた。

1820年代になると、彼女は母を手伝うかたわら、ときおりジャマイカを離れ、「商人」として旅に出かけるようになる。クレオール仲間とともに、あるいは単独で大西洋を横断しロンドンへと渡り、故郷から持参したピクルスやエキゾチックな果物を煮詰めたジャムなどを売りさばきながら、本国 (メトロポール) での生活を経験した時期もあったが、彼女が旅した地域は、英領バハマやフランスからの独立まもないハイチ、スペイン領キューバ、そしてパナマなど、もっぱらカリブ海域に限られていた。そして、そこでもまた、ジャマイカの産物を売り歩き、その地域ではよく見かける貝殻をあしらった装飾品を購入し、またそれをジャマイカに持ち帰り、キングストンの市場で売りさばくという生活を

繰り返した。こうしてその後およそ30年ものあいだ、人生における多少の変化を経験したとはいえ、ジャマイカを拠点にそのほかカリブ海域を往来する彼女の活動が大きく変わることはなかった。

ところが、1854年、シーコルに転機が訪れる。それが、イギリスのクリミア戦争参戦であった。イギリスがロシアに宣戦布告したニュースを聞きつけたシーコルは、戦地へと向かったのである。その理由について、シーコル自身は自伝のなかで、次のように記している。

……戦争を目撃したいと思いました。そして、わたしがよく知っている [かつて] ジャマイカに駐留していた連隊の多くが戦地を目指しイングランドを発つたと聞くと、さらに、彼らのもとに加わりたい気持ちが高まったのです¹³。

その年の秋、ロンドンへ到着したシーコルは、もうすでに戦地へ出発したナイチンゲールを筆頭にした看護婦の一団に仲間入りすることを志願する。ところが、おそらくは彼女の肌が白くないという人種の問題と関係したのだろう。イギリス軍では、ナイチンゲールにつづく当局公認の看護婦を募集していたにもかかわらず、シーコルは、陸軍省、軍の補給局、そして医療部門からも再三にわたって拒否されてしまったのだ。それでもシーコルの戦地へ行こうとする決意は固く、ついには当局の公認を受けぬまま、個人的に単身でクリミア半島はバラクラヴァへと足を踏み入れたのだった。

戦地に上陸したシーコルは、戦場バラクラヴァからさほど遠くないスプリングヒルに「ブリティッシュ・ホテル」という名の宿屋を建設し、そこに次々と運ばれてくる傷病兵たちにクレオール秘伝の薬草を煎じて与え、彼らの介抱に奮闘した。そして、ときには大胆不敵にも自ら戦火へと飛び込み、最前線にまで出向いて行き、傷ついた兵士を手当てし、食料を提供した。また、冬になれば、クリスマスをも本国イギリスにいる家族と離れて戦う兵士のためにプディングを用意し、戦場でクリスマスを祝う気配りも忘れはしなかった。このように、

13 Mary Seacole, *The Wonderful Adventures of Mrs Seacole in Many Lands*, London: The X Press, 2004, p. 71.

激戦がつづくクリミア半島で戦禍を恐れることなく、救いの手を差し伸べるシーコルを、彼ら兵士たちはいつしか「マザー・シーコル」と呼ぶようになっていく。そして、その彼女の献身的なすがたは、兵士たちが書き綴った手紙や『タイムズ』の記者ラッセルの記事などに頻繁に登場し、それがイギリスに伝えられ、ラッセルがのちに「[今さら] イギリス国民に彼女 [シーコル] のことを紹介する必要はない」¹⁴ と記述したことが物語るとおり、メアリ・シーコルの存在は、瞬く間にイギリスで知られるところとなったのである。

しかしながら、シーコルの評判は、戦地におけるイギリス兵の慈悲深き母のすがたとして、必ずしも一貫して好意的なものに収まったわけではない。というのも、彼女が酒保商人として戦地に酒を持ち込み、ホテルでパーティを催しては兵士に大量に飲酒させ酔わせたとか、適切とは言えない行動で兵士とのあいだに私生児をもうけたというのだ。つまり、彼女のモラルについて、こうした明らかにヴィクトリア朝社会の価値観にそぐわない、やや批判的な噂も飛び交ったのである。たとえば、戦後、ナイチンゲールは義兄に宛てた手紙のなかでシーコルについてこう述べた。

……クリミア戦争において、彼女 [シーコル] は“悪質な家”とまでは言わないまでも、それに相当するようなところを経営していました。彼女は男たちに、もっと言えば士官たちに優しくしていました。善を成し、そしてかなり酔わせていました。……彼女 [のそば] には一人と言わずそれ以上の [男] がいて、彼らは今 [そばに] いる人とはまた別の人なので
す¹⁵。

それでも、戦後のシーコルをめぐる次のエピソードから、彼女が兵士にとっては「マザー」であること、そしてクリミア戦争の記憶として忘れることはない存在であったことは否めないだろう。1856年、英仏連合軍がクリミア戦争の最終目標であったセヴァストポリ要塞を陥落させたことで戦争に終止符が打た

14 *Ibid.*, preface to the 1857 edition.

15 Jane Robinson, *Mary Seacole, the Charismatic Black Nurse Who Became a Heroine of the Crimea*, London: Constable & Robinson Ltd, 2005, p. 191.

れ、最後のイギリス軍隊が戦地を離れるのを見届けると、シーコルはロンドンへと戻って行った。そしてその直後、彼女が破産宣告をすると、すぐさまかつての「クリミアの息子」たちが「マザー」を救済するべく「シーコル基金」を設立し、新聞の紙面上で読者に寄付金を募ったのである。さらには、1857年7月には、王立サリー公園で『パンチ』誌の主催による「シーコル基金グランド・ミリタリー・フェスティバル」が大々的に開催され、4日間にわたって繰り広げられたオーケストラや軍楽隊のコンサートには、のべ80,000人が訪れた。これももちろん、シーコルの援助資金を調達するためであり、基金調達の名簿のなかには、かつての兵士たちはもちろんのこと、時のウェリントン公爵夫妻やニューカッスル公、ヴィクトリア女王の従兄ケンブリッジ公など、王侯貴族の名も連ねていたのであった。

また、ときを同じくして、シーコル自身も自らの半生を綴った自伝風の旅行回想録『シーコル夫人のさまざまな土地でのおどろくべき冒険』（1857年、以下、『シーコル夫人の冒険』と略す）を出版し、自らのクリミア戦争経験や兵士たちとの記憶を文字のかたちで残した。そして、先にも少し触れたが、『タイムズ』の記者ラッセルは、その序文にこう寄せたのである。

わたしはこう思う。この序文でスペースを割いて [今さら] イギリス国民にシーコル夫人を紹介する必要はないのだ、と……。イングランドは、決して自分たちの病の世話をし、傷ついた人を捜し出して手を差し伸べ、救ってくれた者 [シーコル] のことを忘れはしないだろうと信じている¹⁶。

『シーコル夫人の冒険』は、政治色も文学的な技巧にも欠けたものではあったが、出版から8ヶ月で完売し、さらにその翌1858年には版を重ねるほどであった。しかしながら、現在、ナショナル・ポートレート・ギャラリーに展示されるシーコルの肖像画に添えられた解説によれば、それでも彼女の財政難が和らぐことはなかったという。またちょうど同じ時期、インドで大反乱が勃発しており、それを知ったシーコルは、クリミア戦争のとき同様、すぐさま陸軍省に

16 Seacole, *op. cit.*, preface to the 1857 edition.

問い合わせ、インド行きを志願した。しかし、理由は定かではないが、またしても当局から拒否されたシーコルは、かつてのように、戦場と化したインド亜大陸へ向かうことはせず、1859年、祖国ジャマイカへ帰国の途についたのだった。

その後、1865年ごろ、ふたたびイングランドへと戻ってきたシーコルは、1881年5月、ロンドンのケンブリッジ・ロード3番地にある自宅にてその生涯に幕を下ろし、ケンザルグリーン・カトリック共同墓地に埋葬された。その後、かつて彼女の「息子」であったクリミア戦争の退役軍人たち、あるいは戦後直後のイギリスでのシーコル・フィーバーを知る者、彼女のことを口にする者も次第に数少なくなっていく。彼女の記憶が次世代へと語り継がれない理由の根底には、またもや人種の問題が結びつくのかもしれない。『シーコル夫人の冒険』初版に寄せられたラッセルのことばもむなしく、まもなく彼女の功績、記憶は風化の一途をたどり、いつしか彼女の存在は忘れ去られたのであった。ところが、その死からおよそ120年後、メアリ・シーコルの記憶は、ふたたび21世紀のイギリス社会に突如としてよみがえったのである。なぜ、今シーコルなのだろうか。

イギリスにおけるシーコルの記憶化を押し上げた背景には、クリミア戦争100周年に際して始まった、彼女の故郷ジャマイカにおけるシーコルの記憶化の問題を抜きにしては語ることはできない。100周年を迎えた1953～56年前後とは、ちょうど1948年に始まるウィンドラッシュ号での西インド諸島からイギリスへの大量移民の動きや、それを端緒にイギリス国内で生じた一連の人種差別の問題が拡大していく時期である。そのなかでのシーコルへの注目は、クリミア戦争において、イギリス軍のために尽力したジャマイカ人女性として、イギリスと西インドを友好的に結ぶ「象徴」的存在を求める動きと捉えられよう。だからこそ、1950年代半ば以降、クリミア戦争で活躍したメアリ・シーコルの記憶を呼び覚まし始めたジャマイカでは、彼女の功績を称えて、看護婦協会の本部施設や大学施設をはじめ、さまざまな施設に対して彼女の名前にちなんだ名称の付与ならびに改称が続いたのである。それからおよそ20年後の1973年、ジャマイカ看護婦協会と関連したジャマイカ人女性たちの一グループがロンドンのケンザルグリーン・カトリック共同墓地で彼女の墓を発見し、その後、長

年放置されて激しく破損したその墓石が修復された。そして、1981年、その墓前でシーコル没後100年を記念した礼拝儀式が催され、それ以後毎年、これが恒例行事としておこなわれるようになった¹⁷。また、彼女の人生を綴った初の著作ともいえるZ・アレクサンダーの『ジャマイカの国民的英雄、そして“女医者”』が刊行されたのも、まさにこの時期、1982年のことであった。

こうしたジャマイカで始まったシーコルの記憶を復活させる一連の動きこそ、そして、そこにクリミア戦争150周年を迎えつつあるという事実が結びついたことによって、現在のイギリスにおけるシーコルの記憶化が始まったと考えてよいだろう。イギリスにおいて急速に高まったメアリ・シーコルの記憶化の口火を切ったのは、彼女の肖像が発見されたことである。2002年、チャレン制作の彼女の肖像画が、ある額装された絵画の裏張りとして使用され、ブーツセールやインターネットオークションを転々としていたところを偶然にも、ドラマチックに発見されたのである [図1]。そして、それに続いて2004年、シーコルは世論調査「偉大なる黒人イギリス人」で栄えある第一位を獲得し¹⁸、その

17 Robinson, *op. cit.*, p. 199; <http://www.maryseacole.com> (the Mary Seacole Centre).

18 現在進行中のシーコルをめぐる再記憶化は、2004年の世論調査の結果発表以降に進展しており、それ以前にシーコルの名がイギリスでよく知られていたとは考えがたい。それゆえに、なぜ世論調査でシーコルが一位となったのか、その背景を検証することが重要であるが、それについては今後の課題としたい。

調査が実施されていたさなか、2003年11月には、イギリス史のなかに黒人のすがたを見直そうとする動きと絡み合い、元労働党議員クライヴ・ソーレイがロンドン市内にシーコルの銅像建立を目標とするキャンペーン活動（Mary Seacole Memorial Statue Appeal）を開始した¹⁹。さらには翌2005年1月、ナショナル・ポートレート・ギャラリーが発見されたシーコルの肖像画を一般公開し、そのニュースが大々的に新聞や雑誌、テレビで伝えられた²⁰。奇しくも、彼女の生誕200年の年に、シーコルはふたたびイギリス国民の注目を浴びることになったのである。これによって、新聞やテレビ、博物館での特別展示などでは彼女のクリミア戦争での活躍が頻繁に取り上げられるとともに、自伝『シーコル夫人』が復刻され、また彼女の生涯を追った伝記、たとえばジェイン・ロビンソン著『メアリ・シーコル——クリミアのヒロインとなったカリスマ黒人看護婦』（2005年）の出版、あるいはヘレン・ラップポートの論文「一度も届くことのなかった招待状」（2005年）のように雑誌でシーコル特集が組まれるなど、これまで忘却されてきたメアリ・シーコルをイギリス史（とりわけクリミア戦争史）のなかに刻み直そうとする動きが急ピッチで推し進められたのである。

しかしながら、ここで注意すべきことは、彼女の没後およそ120年のときを越えて現代イギリスによみがえったシーコルの物語が、一様に、主として彼女の半生を書き記した1857年出版の自伝の記述に多く依拠していることである。つまり、彼女が叙述したクリミア戦争終戦までの語りが繰り返されているにすぎず、その後の彼女の人生については、ほとんど何も語られていないのである。シーコルの存在を、そして彼女の人生そのものをクリミア戦争再考のための一つの指標とし、確かにイギリス史のなかに刻み込み直そうとするならば、彼女についての物語をクリミアから帰還しジャマイカへ帰国するところにとどめず、その先を考え直す必要があるだろう。たとえば、シーコル同様にクリミア戦争で戦地へ入って傷病兵の看護をし、さらには現場の医療体制の効率的な組織化に尽くしたナイチンゲールが、帰国後、彼女自身のクリミア戦争経験を生かし

19 Pat Healy, 'BBC criticised over refusal to show Mary Seacole film', *Nursing Standard*, October, Vol. 19, no. 6, 2004.

20 *Guardian*, 11 January, 2005; *BBC History Magazine*, Vol. 6, no. 3, 2005, p. 6.

て軍隊の改革運動にかかわり、軍の衛生改革とともに公衆衛生の改善などに奔走し、その後は公の場から忽然と雲隠れしてしまったことはよく知られている。それに対して、シーコルは、医療衛生の問題にかかわらず、彼女のクリミア戦争経験をその後の人生にどのように生かしたのだろうか。イギリス軍当局に拒否されながらも、はるばるジャマイカから兵士たちの看護を志願して戦地へ向かったシーコルにとって、彼女のクリミア戦争経験とは何だったのだろうか。

ここに注目したい事実がある。1881年、シーコルが死去した場所がロンドンであったこと、つまりクリミア戦争後、1859年にはジャマイカへ帰国したはずのシーコルが、その後、ふたたびロンドンに戻って来ていたという点である。彼女は、なぜロンドンに戻ったのだろうか。そして、そこで何をしていたのだろうか。

彼女の再渡英の理由については明らかにされていないが、彼女の戦後に触れたロビンソンやラップポートの分析は、両者ともにこうである。1860年代にふたたびロンドンで生活し始めたシーコルは、ヴィクトリア女王に謁見する機会は生涯において一度もなかったが、1867年、ヴィクトリア女王からシーコルのクリミア戦争での活躍に対して謝辞が述べられ、それが『タイムズ』に掲載された。そしてそれと同時に、彼女の「晩年を保障する」ための基金が設けられ、時の皇太子（のちのエドワード7世）が25ポンド、エディンバラ公が15ポンドを寄付し、さらにはその基金に女王自らが個人的に、しかしながら彼女の名前は寄付名簿には決して記載しないことを条件に、50ポンドを寄付したとして世間を騒がせた。また、リウマチを患い、脆弱であった皇太子妃アレクサンドラのマッサージ師を務めたり、シーコルの「クリミアの息子」の一人であるヴィクトリア女王の甥ヴィクター王子（のちのグライヘン伯）が制作した彼女の彫像が1872年のロイヤル・アカデミーに出品されたりするなど、晩年のシーコルは、かなり密に王室との親交を深めたのだ、と。

とはいえ、はたしてこれだけがシーコルの「その後」なのだろうか。ヴィクトリア女王と何度も面会したナイチンゲールではなく、シーコルが皇太子妃のマッサージ師に任命されたプロセスには何があったのだろうか。イギリス軍当局に拒まれながらも看護婦を志願し、クリミア戦争に参加した彼女がイギリスのその後の戦争にかかわることはなかったのか。たとえば、故郷ジャマイカの

モラント湾で起こった暴動（1865年）に対して、破壊的な行動をとった総督エドワード・エア（Edward John Eyre, 1815-1901）や彼を支持するイギリス人たちを彼女はどのように見たのだろうか。そもそもクリミア戦争以前、シーコルが活動の拠点としたのは、主としてカリブ海域であった。その彼女が、クリミア戦争を経てジャマイカへ帰還したにもかかわらず、またロンドンへ帰ってきたのは何ゆえだろうか。クリミア戦争の前後でシーコルの行動範囲が一変したことから、おそらくクリミア戦争で得た経験こそが、その後の未だヴェールに包まれたままの彼女の晩年の生き方に何らかの影響を与えたことは間違いないだろう。それゆえに、ふたたび渡英した彼女の晩年のすがたを問わねばなるまい。そして、これこそクリミア戦争と直面したメアリ・シーコルを記憶すること、ひいてはクリミア戦争そのものを考え直すことにつながるだろう。

4. むすびにかえて

本論考では、クリミア戦争終戦150周年を画期として刊行がつづくクリミア戦争再考の研究を紹介しながら、現在、そのなかで何が問題となり、新たにどのような視点が求められているのかを探ってきた。政治や政策、外交や民衆文化、あるいは戦地へ渡った人びと——どの周辺にクリミア戦争を探るのか、その核たる要素が多様であるがゆえに、それぞれに描き出されるクリミア戦争の様には多少の違いが認められよう。しかしながら、そこに根ざす共通性が揺らぐことはない。つまり、従来多くみられた戦闘そのものの再現を越えて、これまで看過されてきた新しい視点を投じることによって、もっと幅広い枠組みのなかで多面的に重層的にクリミア戦争を捉え直そうとする点である。かつてエイザ・ブリッグズは、クリミア戦争について「評価されることの少ない戦争」²¹と表現し、この戦争へのイギリスの関心が軽微であることを示唆したが、今ようやくイギリスはそれを改め、イギリスにとってクリミア戦争は何だったのか、その意味を模索し始めたかのように感じられる。とりわけ、ロイルやフレッチャー、イシチェンコが重要視した第一次世界大戦、そして、その後の東欧世

21 エイザ・ブリッグズ（今井 宏 他訳）『イングランド社会史』筑摩書房、2004年、364頁。

界の現状が「クリミア戦争の遺産」であるという見解はその最たるものであろう。また、フレッチャーは次のように主張する。クリミア戦争以降、イギリスはヨーロッパ大陸の方向に視線を向けることをやめ、帝国事業、すなわち植民地へとそのベクトルを移行させたのだ、と。はたしてその理由は、この戦争のどこにあるのだろうか。クリミア戦争の衝撃は、国内の戦争熱を高揚させ、また戦争の現場にも影響をもたらしたスペクタクルと絡み合わせて、その後のイギリスをどのように転じさせたのだろうか。また、それは植民地ジャマイカ出身のメアリ・シーコルのクリミア経験および彼女の晩年の生き方とどのように重ね合わせられるのだろうか。

こうした新しい視点や側面への注目は、本論考の冒頭にも述べた点、すなわち、クリミア戦争の衝撃がその後のイギリスを変化させたという問題にも、新たな見直しを迫りつつある。すでに触れた軍楽隊改革は、その好例かと思われる。実際、ラッセルをはじめ、戦地に初の従軍記者を派遣したこの戦争のなかで、初めて明るみに出された事実こそ、他国（とりわけフランス）と比較した場合に顕在化した、イギリス軍楽隊の醜態だったのである。戦地での音楽のあり方が問題視されるようになったこと、すなわち、イギリスにおける「戦争と音楽」の関係性が変化したこと——それを暴露したのが、クリミア戦争だった。その結果としておこなわれた改革では、イギリス初の軍楽隊養成学校であるネラーホール軍楽学校が設立された（1857年）。そして、総軍司令官ケンブリッジ公を中心に軍楽隊の改革が推進され²²、国内では今日に至るイギリス軍楽隊の伝統を形成していく一方、軍隊や入植者、宣教師たちとともにアジアやアフリカの植民地各地へと進出し、その文化を「文明」の象徴のひとつとして現地に徐々に浸透させていったのである²³。

この軍楽隊改革とその進展期について注目すべきことは、それが当時、労働者の娯楽として一大ブームを起こしていたブラスバンド運動²⁴とも密接に結び

22 拙稿「迫られる軍楽隊改革とブラスバンド運動」『ヴィクトリア朝文化研究』日本ヴィクトリア朝文化研究学会編、第3号、2005年。

23 Rob Boonzajer Flaes, *Brass Unbound: Secret Children of the Colonial Brass Band*, Amsterdam: Royal Tropical Institute, 2000, pp. 9-11.

24 19世紀イギリス社会で、人びとがブラスバンドに熱狂し、一種の社会現象ともなった「ブラスバンド運動」については、拙稿「1853年、第1回ベルヴェー・ブラスバンド・コンテスト」『甲南大学紀要』文学編135、2005年、119-32頁を参照されたい。

ついていたことにある。それを考えた場合、それ以前にはほとんど存在しなかった軍隊を想像させる名称をもつブラスバンド団体がこの時期のみに急増している²⁵という事実は無視できない。たとえば、デュズベリ・ライフル兵団バンドやベイカップ第四ランカシア・ライフル義勇兵バンド、ハリファックス第四ウェストヨークシア・ライフル義勇兵バンド——このように「ライフル隊」や「兵団」、「義勇兵」といったことばが、1860年代以降、ブラスバンド団体の名称として頻出するようになったのである²⁶。特筆すべきは、これらの団体がこの時期に新たに結成されたバンドではなかったということ、言い換えるならば、彼らがそれ以前に用いていた名称が改称されたにすぎなかったことである²⁷。いふなれば、労働者の娯楽であったブラスバンドが、ちょうど軍楽隊改革とときを同じくして、ある種の「軍隊化」をたどりつつあったことになる。従来、軍楽隊改革とブラスバンド運動という二つの動きは別々のコンテクストで語られてきたが²⁸、この両者の関係こそを考える必要があるだろう。それは、19世紀半ばを過ぎたイギリス社会の何を物語っているのだろうか。これらをさらに分析するなかで、フレッチャーの主張——イギリスは、クリミア戦争を最後に、大英帝国へと視線を転じたということ——とその様子がおのずと見えてくるのかもしれない。これについては、稿を改めて論じたい。

クリミア戦争終戦150年を控えた今、クリミア戦争研究はようやく新しい展開を迎えつつある。

参考文献

Ziggi Alexander and Audrey Dewjee, *Mary Seacole. Jamaican National Heroine and*

25 拙稿「迫られる軍楽隊改革とブラスバンド運動」47-48頁。

26 “List of Prize Winners, Brass Band Contests, held at Belle Vue Gardens, Manchester, September Contests, 1853-1925”, Chetham’s Library, Manchester, Jennison Collection (F. 4.4)

27 Herbert, ‘Nineteenth-Century Bands: Making a Movement’, Herbert (ed), *The British Brass Band: A Musical and Social History*, Oxford UP, 2000, p. 38.

28 たとえば, *Ibid.*, p. 3; Robert Giddings, ‘Delusive Seduction: Pride, Pomp, Circumstance and Military Music’, John M. MacKenzie (ed.), *Popular Imperialism and the Military, 1850-1950*, Manchester UP, 1992, p. 35-42; Jeffrey Richards, *Imperialism and Music: Britain 1876-1953*, Manchester UP, p. 411-16, 434-46などを参照されたい。

- 'Doctress' in the Crimean War, London: Brent Library, 1982.
- Winfried Baumgart, *The Crimean War 1853-1856*, Oxford UP, 1999.
- J. B. Conacher, *The Aberdeen Coalition 1852-1855*, Cambridge UP, 1968.
- , *Britain and the Crimea 1855-56: Problems of War and Peace*, New York: St. Martin's Press, 1987.
- George F. Dallas (ed. by Michael Mawson), *Eyewitness in the Crimea: the Crimean War Letters of Lt. Col. George Frederick Dallas*, London: Greenhill, 2001.
- Ian Fletcher and Natalia Ishchenko, *The Crimean War: A Clash of Empires*, Kent: Spemount Ltd, 2004.
- Susan-Mary Grant, 'New Light On the Lady With the Lamp', *History Today*, September 2002, pp. 11-17.
- David Goldfrank, *The Origins of the Crimean War*, London and New York: Longman, 1994.
- Stephen Harris, *British Military Intelligence in the Crimean War 1854-1856*, London: Frank Cass, 1999.
- Leopold Heath, *Letters from the Black Sea: during the Crimean War 1854-1855*, London: Bentley, 1897.
- Christopher Hibbert, *The Destruction of Lord Raglan: A Tragedy of the Crimean War 1854-55*, London: Longman, 1961.
- Richard Kelly, *An Officer's Letters to his wife during the Crimean War*, London: Elliot Stock, 1902.
- Ulrich Keller, *The Ultimate Spectacle: A Visual History of the Crimean War*, Amsterdam: Gordon & Breach, 2001.
- Andrew Lambert, *The Crimean War: British Grand Strategy against Russia, 1853-1856*, Manchester UP, 1990.
- Alastair Massie, *The National Army Museum Book of the Crimean War: The Untold Stories*, Sidgwick & Jackson, 2004.
- Karl Marx, *Eastern Question*, London: Swan Sonnenschein, 1897.
- Clive Ponting, *The Crimean War: the Story Behind the Myth*, London: Chatto, 2004.
- Helen Rappaport, 'The Invitation that Never Came: Mary Seacole after the Crimea', *History Today*, February 2005, pp. 9-15.
- Jane Robinson, *Mary Seacole: The Charismatic Black Nurse Who Became a Heroine of the Crimea*, London: Constable & Robinson Ltd, 2005.
- Trevor Royle, *Crimea: the Great Crimean War 1854-1856*, London: Little Brown, 1999.
- Mary Seacole (ed. by Marcia Williams), *The Wonderful Adventures of Mrs Seacole in*

Many Lands, London: The X Press, 2004.

Hugh Small, *Florence Nightingale: Avenging Angel*, London: Constable, 1998.

Michael Springman, *Sharpshooter of the Crimea: the Letters of the Captain Gerald Goodlake VC 1854-56*, Leo Cooper, 2005.

Philip Warner, *Crimean War: A Reappraisal*, London: Barker, 1972.

Cecil Woodham-Smith, *The Reason Why*, London: Constable, 1953.